

流されし聖なる血潮

半歳を雪に埋もれた北海道の天地も、巡り来る春の暖かさに、久し振りの土の香をただよわせて、庭のそここには、昨年の秋に落ちた薄黒い葉の積まれている間から、黄色な芽がふくよかな姿をして顔を出して来ました。やがて葉を拡げて花を咲かすでしょう。延びて行く草木の有様を見入るならば、そこには生命が一時も、一刻も停ることなく進んで行くことを知るのである。かくのごとく天地の万物は皆進化し発達し変化してやまないのである。水の流れのごとく、風の吹き、雲の行くように。かく語りつつある私も諸君も、夜となく昼となく人生の旅路を進みつつあるのである。流されつつあるのである。我々はどこへ行くのであるか。そもそもこの人生に何のために生まれ、どこを目標として進んでおるのであるか。我らの知り得るところでは行く手には確かなものが一つある。それは墓であり死であります。現実はいく教えるのであります。しかし死はすべての終りであるか。墓場の彼方（かなた）に何らかの世界がないか。あると明答を与え得るものがここに何人ありましようか。

行く先も知らず、目的地もわからず、あたふたとして毎日を夢の如くに暮す生涯の終りは甚だ悲惨なものに相

違はない。或人はいう。日進月歩、日々に新らしい活動がつづき、競争の激しい生活難の只中であつて、諸君らにおいては受験地獄にあつて、その日の予習と復習に、運動に追われているものにとつて、そんなことを考える余裕が無いという。

一体目的も行先も不明な多忙が何の益があるのでしょうか。行手のなんたるかも知らずして競争し戦いつづける人生、死のために競争してなんの得る処があるう。ナポレオンのごとく欧州を征服しても、セントヘレナにおいて彼は彼の霊の行くえを失つたときには、その人生はむなしきものであつたのであります。

人生における最悪の力は死であり、墓であります。

死の前にいかに花やかな人生も色あせて、いかに盛んに見ゆる活動も要するに空ではないか。

アレキサンダー大王がペルシャに遠征してペルシャの建国者クロス大王の墓の前に立つたときに、墓の表に

「後に来りて此地を取る者よ、そは誰れなるにもせよ、われに墓だけの土地は与ふるを惜む勿れ。そは後世必ず

此地を領する人の立つを知れば也」という事が書きしるされてあつた。其の後に来るものを知つてアレキサンダ

ー大王は今更に人生の果敢なさを嘆じたという。

仏国の文学者フローベルは死に直面して人生の空(くう)にして惨澹(さんたん)たることを痛感して「私が人生に於て求めたもの

は墨で汚すための幾重ねかになつた紙片のみであつた。私は果しない砂漠に当てもなくさ迷うているように感ず

る。今私をささえている希望はやがてこの世に別れを告げることであるが、私にはあの世が分らない。悲惨はこ

の世だけで十分だ。」暗黒な死の力にぶつかるときに、人生の種々相をその靈筆に躍如たらしめし大文豪も、自己

の生涯はただ単に幾首枚かの原稿用紙を墨で汚すために書いたに過ぎなかったと嘆ずる外になかった。死が人生の最後であるならば、人生とはとどのつまりは砂漠の旅に疲れほてて、のたれ死をするに等しいというより外はないのである。

大学病院に試験用にされるために多数の野良犬が一定の囲いの中に飼われて一緒に遊んでいます。ほえるもの、じゃれるもの、飯を喰うもの、水を飲むもの、雑然百態であります。しかも毎日のごとく順番が来て、段々に彼等は解剖台でメスの下に死んでゆくのです。それも知らずに犬どもは暮しているのである。人間どもはどうであるか。札幌という市の中に十六万人が入れられて毎日順番が来るなれば豊平の焼場に蒸し焼にされて一片の煙、一かけの石灰質となっていくのである。

毎日のごとく悲しみ限りなき死の現実が繰り返されて、ここに集っている我らの順番に迫って来ているのであります。

私たちは実際に自分の死顔を見たか。自分の死の姿を切実に経験したろうか。他人が毎日死んで行くということを知り、また聞かされてはいる。人間はいつか死ぬものと思っではいる。「どうせ死ぬんだ」などと輕輕しく口をきく。しかし、それは単に死という事、葬式の様子などを頭の中で思い浮べたに過ぎない。東京の大火を新聞で見るくらいで、熱くもけむくもないことである。実感として死を感じたか。知らぬ間に、いつか死んで行くのでない。死の正体をハッキリと見きわめて、勇敢にこれと戦い、ごまかさずに死の全体を味わわんとしたことがあるか。死線に足を踏み入れたことがあるか。札幌商業学校の昨年度の幹事長であって、本年三月三日目出度

く卒業した深谷三六郎君は思いがけなくも三月三十日午後一時四十五分、病のためにたおれました。

彼は二年のとき剣道の時間、友だちが悪戯をして、しないの先の割れたもので彼の腕をついた傷から結核菌が入り骨髓炎となり入院治療をなすこと三度、頭脳明晰の秀才でありながら病氣のために学校を一カ年休むなど、絶えず死の恐怖におそれつつも昨年春五年となり、衆望を荷って開校満十週年を迎える札商の幹事長として病軀もいとわずに情熱誠心をもってその職責をつくし、九月の記念日を心待ちに待っていたのである。しかも如何なる不幸か八月初旬からまたまた足の骨が痛んで、四カ月の長い間大学病院に入院したのである。

何度か手術台上にのせられて死に直面した彼は、私の所に来て何度となく死の問題を語りまた熱心に聞いて行ったのである。其の問いの深刻痛切なる、私も思わず冷水をあびるの思いをした。「おれも死ぬんだな、どうしても死ぬんだ。不思議だ不思議だ」と言っていた彼の言葉は今もなお私の耳に響いて来るのである。病院を退院して一日、私の当直の日に夜一人で彼は私を尋ねて来た。色々と死の問題を話したときに彼はこんな告白をしている。「もう大丈夫、病氣にならぬと思った矢先、八月またまた病氣になり切角春から力を尽くした学校の記念式にも出席出来ず、自分はほんとうに残念で泣いていました。そして余りにも神は無情だと思ったのです。先生は神ほ愛だ、愛だというけれども、僕には余りにも冷酷残酷だとうらんだのです。しかし手術の日が来てまた足を切られる日になると、神はない、神はない、と思いつづけると不思議にも天地が真暗になってきて、しまいには死の恐しさが圧倒的にわが身に靈におそって来てどうすることも出来なくなりました。私はたまらなくなつて、また心では否定したつもりの神の名を称（よ）んだのです。そうすると私にはまた輝かしい光や希望が心にさして安心

して手術をもらうことが出来、こうして先生とお話出来るようになったのです。しかし、いつかほんとうの死が来ると思うと、もっと信仰を深くしたいと思う」と申すのです。しかもついに彼は死んで行ったのです。今は彼の姿を地上に見ることは出来ません。なぜ人には生きたい生きたい、いつまでも生きたいという希望があり要求があるのに死ぬのであろうか。なぜに目的の分からない行先不明の旅をつづけねばならぬのであろうか。

それは人間が罪を犯しているからであります。罪とはなんであるか。すなわち人は万物と共に神によつて造られ神によつて生き、神によつて永遠に生くべきであつたのである。しかるに人はおのれを中心としておのれを天地の主としたのである。神を捨て、神に逆らい、また神を忘れ、遂には力にもならぬ者を力とたのみ自ら完(まった)しと称(とな)えて愚かとなり、すべての事が人によつて逆になつた結果である。神に逆らつることこれ罪である。

「罪の価は死なり」もしも罪がなかつたならば死はないのである。罪を犯さぬ人間があろうか。一人もない。しからば死をまぬがれる人は一人もないのである。

先ほど読んでいただいたヨハネ伝第八章の物語を諸君と共に一度考えて見よう。

おのれを中心として他人ばかりを審(さば)かんとする学者パリサイ人らは実に自己の罪を知ることが出来ない。しかもそれだけ罪は深いのである。かくてイエスの一言は彼らの肺腑(はいぶ)を貫き彼らの良心を射通した。イエスの御言(みことば)に接して彼らの心の罪は凡(すべ)て明かにせられ、口は閉じ石は手から落ちたのである。イエスは山の上で教えられた教の中に、「姦淫するなかれ、と言えることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ。すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり」と。何という鋭い言葉であるか。神の正義は我らの心の中の淫(みだ)らな

念いをも見逃し給わないのである。

私は中学の三年、四年のとき丁度諸君と同じ年頃にはかなり不良の性質で満ちていたものである。今日この席上からお話をするの資格さえないものである。私は何べん人目をさけねばならなかったか知れない。心にちかいてもし、決心もしたけれども、私は罪を犯さぬわけにはいかなかったのである。良心がせめ、不愉快が残っても、一時の誘惑を退けることが出来なかったものである。肉慾の奴隷であつた。「色情を懷きて女を見るものは既に心のうちに姦淫したるなり」その言葉はグサリと私の良心の真中を射通した。逃れる術もなく私の罪は明かである。

嘘(うそ)をいわぬ人間があろうか。私は今度入学した二二〇人の一年生に聞いて見た。だれか今まで一度もうそを言わなかつた人がありますかと。その人は手を上げて下さいと言つた。けれどもだれも手を上げるものはなかつた。大人になつて罪を知るのではない。小児の中でも罪はチャンとあるのである。自分の我、自分というものを通さんとするとき、神を忘れ神を離れ、そこに罪があるのである。

罪があれば死があるのである。罪を犯した、それがどうしたのかと、のんきにしている段ではない。罪を犯すところに必ずや最悪のさばき、死がくるのである。罪の処分、それは即ち死の解決であるのです。一度犯した罪、それは永遠にこの宇宙に記録せられずにはおかれない。それは丁度一度口外した言葉をまた口に吸い込むことが出来ないと同じである。静かに澄んだ池の表に石をなげて御覧なさい。一度起つた水上の波紋は円い輪をなして段々と拡がりついに他の岸全体に及ぼし、岸にはえている葦さえもゆるがすであろう。我らの犯した一つの罪は

隣人から隣人に社会から社会に、地球全面に及ぼさずにはいない。人の世の何たる浅ましき姿であるか。戦争が起り、虚偽が横行し、収賄が行われ、風俗が乱れ、さいぎと怨嗟（えんさ）と呪（のろい）に渦まき人の世は、かくて阿修羅の現実世界を形造るのである。

しかも人々はその罪を互いになすりつけて平然としているのである。他人を責めて自己の罪を忘れてるのである。姦淫の女を責めて自分を清しとするパリサイ人である。すべてが神を忘れそのさばきを恐れないのである。世の罪と言わせ世の責任と言う。何ぞ知らん、それは自分の犯した罪の拡大せるものなるを知らないからである。かくて天下に義人なし、一人もあるなし。当然のごとく死は世界の全面を支配しているのである。ああ、されど人間は、世界は、否自分はこのままでいいのであるか。罪あるままで死の運命に迫られて、目的を知らざる人生を歩んでそれで自分はよいのであるか。多くの人間は罪たることも知らずにいたのである。しかるに天地の造り主なる神はこれを見逃しにし給わなかった。神は人類を愛し給うために、人の子の罪をそのままにし、すべてを死において滅ばし給わなかったのである。

ここに不思議にも、神は人間の形に於て神の独（ひと）り子、キリストを世に遣わされたのである。ナザレ村の大工ヨセフの長子として、母マリヤより生れ給えるイエスこそはその人であつたのである。

イエスが神の独り子であり、我ら人間の中にありて我らと異なるところはイエスは罪を犯さなかったことである。イエスの人格には罪がなかったことである。古今東西、罪なき人格はイエスの外にはないのである。であるからイエスは先ほどの物語の中にあるごとく、姦淫（かんいん）の女に向つて「われも汝を罪せじ」と、彼には女を石にてう

つべき資格を持ちながら、これをゆるされたのである。

何のために神は罪なき独り子をこの世に遣わし給うたか。それは彼を信ずる人間たちの罪をイエスに由って打消し、人間たちに死を越える永遠の生命を与えられんとしたからである。罪あるもの同志で互に罪を取消すことは出来ぬ。真黒な色と眞黒な色をどんなにしても白くはならない。眞黒な色はその色を清めさらす無色の特別な薬品を要する。

人類の積み重なる罪を清め、ゆるされるためには、罪なき神の独り子なるイエス・キリストが降り、罪のあがないとして十字架にかかりその生命を与えらるる外はなかつたのである。

「人の子の来れるも事（つか）へらるる為にあらず。反つて事（つか）ふることをなし、またおほくの人の贖償（あがない）として己が生命を与へん為なり」とキリストは申されたのである。

罪なきものが罪のさばきなる十字架上に釘づけにされ苦難の血を流さる。この外には人類の罪すなわち私たち一人一人の罪は消えないのである。

神の独り子が人類に代り、我々に代り、身代りとなられたときに我らこれを信ずるものは救われるのである。

「人の子の栄えを受くべき時いたれり。一粒の麦、地に落ちて死なずば只一つにて在らん。もし死なば、多くの果を結ぶべし。」「我もし地より挙げられなば凡ての人をわが許に引きよせん」今を去る一九三〇年の昔、春まだきカルバリの山上に、二人の盗賊の間にはさまれて罪なき神の小羊は、彼を十字架につけるのがいかなることであるかも知らざるはどに、罪に満ち、憎悪と残虐に支配された人類（我らもまたその一人であり実に彼らと同じ

罪である） にあって、むごたしくも釘づけにせられたのである。

頭にはいばらのかんむりがひたにくい入り、髪にまつわり、ひたいと両手の甲と重ねられた足の釘あとから、したたる聖なる血潮は流れつたって大地にポタリポタリとおちてゆくのである。我ら人々の罪は彼を刺し彼の血を流させたのである。しかもその時イエスの口から出でし言葉はなんであつたか。

「父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり」と。罪なき自己を十字架につける人類に対し、イエスはそれを神にとりなしたのである。何という絶大の愛であらう。彼こそ神であつたのである。されば心なきローマの軍人、その刑場を率いる中隊長も「げにこの人は神の子なりき」と叫ばざるをえなかつたのである。

神はこのイエスの十字架によつて、死せるイエスを復活せしめ給つたのである。死を越えて、墓の彼方に而も輝かしい世界を開き給つたのである。彼キリストを信じ彼の十字架の血潮に清められた人類に、神は死を越えて永遠に生きる道を与えたもつたのであります。罪の問題はキリストの十字架によつて解決され、それを信ずるものには死はないのである。永遠の生命が約束せられたのである。そこに信仰の生活が生ずるのである。

自己を中心とした生活をうちくだかれて、地獄におつべき身がキリストの愛にすぐわれその喜びによつてキリストの心を心とし、キリストの愛にあずかり彼と等しくおのれの十字架を負い、また他人の十字架や運命に関係を持つて神の御命令のままに人生を送ることが出来るのである。

そのとき我らは永遠から永遠にあり給う神と共なる生活、すなわち死も墓もなく、輝かしい希望、美しき愛、言い知れぬ平和を心に受けつつこの人生を喜び感謝し楽しく愉快に生活することが出来るのである。

短時間では言いつくせないので残念でありますが純真なる青年諸君よ、ナザレのイエスは如何に罪なき人であり神であるか。十字架の救いはなんであるか。どうか真面目に、自己の死と運命に立場を置いて、それを知るために忍耐して教会の研究会に來られるよう切望してやみません。

（一九三四・四・一八 於札幌北一条教会）